

1. 研究の目的

本研究では各時代の都市改造事業における計画者の既存の街路構造に対する評価の変遷を通して、街路を一つのまちづくりの基礎単位とするという「通りの意識」がどのように継承されたのかを明らかにすることを目的としている。城下町都市に関する既往研究においては江戸時代とある時代の 2 点間、あるいは近代以降のある 2 つの時代における比較や考察を行っているものが多いが、城下町の歴史性は江戸時代からのみ見出されるものではないはずであり、さらには城下町都市における歴史性は江戸時代を基準とした 2 点間で定められるものではなく、各時代において「それ以前に形成された街路構造」への評価が繰り返し行われてきたという連続的なプロセスによって定められるものであると考えられる。そこで近代以降に少しずつ変化していった街路構造に対する評価を各時代の都市計画資料から通史的に明らかにする。

2. 活動報告

2-1. 静岡大火の復興計画における議論

まず城下町都市静岡における計画者の既存街路構造に対する認識を明らかにすることとした。1940 年に発生した静岡大火の復興の際に臨時復興局長である阿部喜之丞は静岡の中心は呉服町通りであるという認識を持っており、「中心は何と云って呉服町一帯の繁華街に置く」「静岡繁栄の永い歴史と伝統と力とがある、それは心臓部と言うべき地域であって将来の発展の中心点もそこにある」といった記述が見られる。それに対して市民の反応としては 1940 年 3 月 10 日の静岡新報において以前の正方形グリッドと長屋型の家屋による特徴的な構成を「区画整然たる街並み」と評価し、背割り道路の整備によって「ゴチャゴチャ」してしまう可能性があるという指摘している。これらのことから大火復興における区画整理はあくまでも都市不燃化のために行われ、加えて背割り道路の復活には「せり空間」の存在が影響しているのではないかという仮説は見直しの必要があると判断した。

これまで「通りの意識」につながると考えてきた「大火復興時における市街地の変化を望まない市民の保守的な意向」については、

- ① 防火道路が繁華街である呉服町通りの賑わいを分断してしまうのではないかとこの危惧
 - ② 防火道路の導入に伴う土地買収に対する不満
 - ③ 2 割の土地縮小という方針や共同建築の造成に対する抵抗
- と解釈することができるが、街路空間に対する意識、コミュニティの変化については踏み

込むことができず、来期への課題となった。

2-1. 戦災復興都市計画における都市計画理念

次に戦災復興事業における全国的な動向を明らかにすることとした。都市構造には権力、イデオロギー、アイデンティティが大きく影響すると仮定した場合、戦災復興は世界中の都市において都市計画の大きな転機になったと考えられる。敗戦国の多くは戦災復興都市計画において前政権を否定する動きが生まれそれが都市計画に大きな影響を及ぼした。しかし日本の城下町都市においては江戸時代からの街路網を継承するケースが多く、戦災復興における主なテーマは「都市の近代化」であり敗戦国であるにもかかわらず前政権に対する反発やアイデンティティの獲得などの動きが都市空間という場においてなされなかったのではないかと考えた。そこで戦災復興期における「復興情報」や「新都市」のなかでどのような都市計画理念が生まれどのような議論がなされたのかを明らかに分析することで戦前と戦後の都市計画に連続性は存在するかを明らかにした。

戦災復興都市計画は 1949 年に再検討されることになるが、それ以前の計画では街路計画が先行して計画された。多くの都市で 100m 道路をはじめとする広幅員街路が多数計画され、「都市計画の民主化」が叫ばれるようになった。このテーマにおける視点は、

- ・これまでの都市計画は封建的であり資本主義的
- ・都市計画決定機関の地方自治体への移行 → 市民の代表による都市計画決定
- ・「市民に納得してもらおう」必要性
- ・軍用地の解放による公園緑地の整備
- ・主要施設に対するビスタを意識

というものであったが、1948 年に入ると広幅員街路の是非が議論されるようになり、「街路の幅員決定の際に建築を考慮していない」「広幅員街路は現実的都市計画に対応していない」との批判が生まれた。このような流れの中で戦災復興都市計画は再検討され、多くの都市で計画されていた 100m 道路をはじめとする広幅員街路の計画は縮小されることとなった。

このようなことから当時の都市計画理念としては戦前の都市計画における思想を否定する傾向が強かったが、再検討によって継承せざるを得ない状況となったと考えられる。また、戦前の都市計画は中央集権的であったため戦災復興期においては「都市計画の民主化」が積極的に議論された。この時期に歴史的資源の扱いについての議論が少なかったのはこのような状況であったことが大きく影響していると考えられるため、1950 年以降の都市計画における議論も追う必要があると感じた。